蓬莱町だより

第十一号
昭和60年7月20日
発行者　蓬莱町会
編集者　文化部

蓬莱町界隈（その八）

旧制郁文館中学（Ⅳ）

林　順信

◇小型陸軍兵の制服制帽

昭和十二年七月に勃発した中国との戦争は、最初のうちは、南京や上海を攻略した日本軍の勢いはよかったが、武昌、漢口、漢陽のいわゆる武漢三鎮を攻略する時は難攻不落で、大きな犠牲を払ったが、中国の戦時首都・重慶には全く手を焼き、中国への米英の援助もあって、長期戦にもつれ込んだ。昭和十五年十一月に、皇紀は二千六百年ということで、未曽有の祭典を催したのが最後で、いよいよ第二次大戦へと拡大されて行った。

この戦時下で、我々小・中学生の上にも、銃後の勤めとして、制度上や日常生活上に多大な影響を及ぼすことが幾つか出て来た。

当時は今流に言えば、六・五・三・三制で、小学校から上へは、旧制中学校を五年間通うことが普通だった。中学校への入学試験は、それまで筆記試験と面接とで行われていたが、それは大正十五年生まれの人たちが受験した年、昭和十四年春が最後で、昭和二年生まれの人たちの卒業した昭和十五年春の中学入試は、内申書と面接とだけで合否を決定された。私など昭和三年生まれの者共は、その新方式の二回目の卒業生だった。私は一クラス六一名中の四一番という成績だったから、筆記試験にはかなり自信があったとしても、受ける学校がぐっと狭められて、止むなく私立中学へ入学した。

学校成績のことはどうでもよいとしても、中学生の服装には閉口した。私どもが入学した昭和十六年からは、従来の学生帽の黒羅紗の丸帽に代わって、カーキ色の戦斗帽をかぶせられて、洋服も、それまでの紺の詰襟上下だったのに代えて、カーキ色の軍服同然の制服を着用しなければならなかった。郁文館中学といえども同様で、昭和十六年入学の者から、軍隊調の服装となった。しかも、週のうち三日程は、学校で軍事教練があったので、その日には、家を出る時から、ゲートルを巻いて通学しなければならなかった。中には背が低くて、かわいらしい兵隊さんみたいな中学生もいたが、私はどうも恰好が悪くて、何だか本物の中学生になった気持がしなかった。街を歩いていても、一年上級の先輩たちが美しくて仕方がなかった。

ゲートルは、ただ巻けばよいというのではなく、巻いた最後の三角形のところの線が、ズボンの横の線と一直線を形づくる様に、正式に巻いていなければならなかった。また、編み上げの靴紐を、ゲートルの中にしまい込んで巻かねばならない。ほんとうは、靴紐をゲートルに巻かない方が恰好がよいので、上に出しているのを見付かると、えらく叱られた。配属将校に見付かったら、ビンタを喰うこと必定であった。

郁文館中学の朝の登校時には、正門のあたりは、とても賑かだった。中学生一人では門から中に入れず、必らず三人、四人と連れ立って、正しく二列となり、校内をくぐる時には、「歩調とーれ、かしらー　右」と、上級生が号令をかけると、それに続く中学生は、右の門柱のところに立っている、風紀委員、当番生に敬礼をしながら入門する。風紀委員は、それぞれ入校する学生の服装を一つ一つ点検して、ボタンを掛け忘れている者、ゲートルを正しく巻いていない者を探しては注意をする。当時の中学生はまるで小型陸軍兵の恰好をしていた。通学時、そういう行進をしながら門をくぐる中学生で、郁文館中学の正門前は、さながら師団の入口の如き観を呈した。

我々中学生だけではなく、教鞭をとっていた教師も、出来ればカーキ色の国民服に戦斗帽をかぶることとなっていたが、下は普通の背広でも、頭には、カーキ色の戦斗帽をかぶることに

なっていた。

◇記憶に残る郁文館生徒

戦前・戦中の中学校には、落第ということがあった。中学一年に入学してみると、上から落第して、もう一度一年生をやる者が、私のいた京華中学では三四名もいたのには驚いた。一学年二百名のうち一割五分に当たる人員が落第して来るのにはびっくりした。平均点が六十点以下の者と、平均点はどんなに高くても、一課目でも、六十点を割ると落第となった。ただ、戦時中のこととて、中学校に配属されていた将校の権限は絶対で、これににらまれると、校長といえどもだめで、配属将校が落第と言ったら、落第させられるが、逆に、成績が多少悪くても、教練の名人で、将校に気に入られていると、落第を免れることがあった。

私どもの一級上から落第して来ると、昔からの紺の帽子や学生服から、国防色の軍服にかえなくてはならないので、新規に洋服を作るなど、さんざんな目にあった。

こんな堅苦しい服装を押しつけられても、そこは若い者で、特に、下町からの通学者の多かった郁文館中学や、私の京華中学などでは、それぞれに帽子や、上着を変形したり、ズボンにゲートルを巻く恰好を工夫して、粋がっていた。

昭和十七、八年頃、東京の旧制中学校同志の仲間では、既に名物男、喧嘩の強い男、今で言うなら番長がいて、名が東京中に知れわたっていた。今でも想い出せるのは、文館（郁文館のことをこう呼んだ）の松谷というのが腕っぷしが強く、男の中の男伊達といった感じで有名だった。今は小金井市の市会議員の名古屋、刑事の息子ながら意気がっていた時田などが知られていた。時田は、街で刑事につかまって、

「お前のお父さんは何の職業だね？」

「つまんねェ商売よ」

「何の商売か言ってみろ」

「デカよ」

と言っては、取調官を困らしていた。この当時の都内のつわものを列挙してみよう。

京華中学では、藤岡、土田、小林の三羽がらす、京華商業の木原、中島、相馬、宇都木、京北の梅沢、上原、本中（本郷中学）の秋葉、順天の宮地、錦城の佐藤、駒中（駒込中学）の石原、足中（足立中学）の武相、開成の浮谷、八中の河合、十一中の大屋などというのが、腕っぷしが強くて知られていた。そして、彼等の間では、それぞれのランキングというか、格付けがされていて、文館の松谷と京華の藤岡とは、「ダイキョウ」（兄弟）の「アイツキ」（付合）とか、足中の武相と十一中の大屋とは、しぶろく（四分六）とかさぶしち（三分七）の「アイツキ」だとかいうことまで定まっていた。

現在、中学校でのいじめのことが問題になっているが、昭和十七、八年頃の我々の悪童どもは、決して素人には手を出さず、自ら与太者と任じている者以外には手出しをしなかった。むしろ、弱きを助け、強きを挫く仁侠の精神があったものだ。

私と同級生の郁文館の級長といえば、今日推理作家として活躍中の梶龍雄だけが健在で、あとの赤塚文雄と小関の二人は、惜しくも若くして他界してしまった。赤塚文雄は、蓬莱町の電車通りの角にあった、鳥肉の卸問屋の染谷の息子で、茨城県出身の尊父は本郷区会議員だった。赤塚文雄は、私と誠之小学校の同級生で、御茶の水の東京医科歯科大に入学した柔道の有段者だったが、惜しくも在学中に病死した。また、中野から通っていた小関は、赤塚と同じく、東京医科歯科大学に合格したが、総武電車が走行中、ドアが突然開いて、電車から川の中に落され、急死したことは、全くお気の毒で、周囲の人たちから惜しまれた。

◇戦時中の勤労動員

郁文館に学びもしなかった私が、郁文館の生徒のことに詳しいのは、共に、同じ、日立製作所の亀有工場で、戦時中、勤労学生として働いていたからである。私共、昭和十六年春の入学組は、昭和十九年の第一学期が終了すると、七月初旬から、学校へは通わず、各地でそれぞれの軍需工場へ派遣されて、現場で働くこととな

った。私の京華中学と郁文館中学とは、共に、日立の亀有工場に動員された。戦時中の日立亀有工場は、戦車と上陸用舟艇気筒を拵えていた。エンジンの機関体、クランクシャフト、カムシャフト、シリンダー、ピストン、ロッドなど、V型十二気筒エンジンで、我々は、部品に応じて、鋳物工、鍛造工、機械工、事務員として、終戦の日まで働き続けた。こういう勤労動員は、東京に限らず全国的なもので、東京では、板橋にあった大規模の造兵廠などには、大勢の学生が動員された。最初のうちは、月に一度だけ通学日があったが、遂には、月々火水木金々という風に、学校には行かず、常に工場に直接通勤することとなった。

従って、昭和十九年七月から、終戦の年の三月十日の大空襲で、郁文館中学が灰燼と帰すまでは、中学校の三年生以下の下級生のみしか学校にはいないという月日が続いた。こういうハンディキャップのほかに、私共、昭和三年生まれの者共は、五カ年の旧制中学の制度の中で、すべて四年修了で卒業ということに改められ、上級学校の入学試験を、一級上の人達と同じく受けなければならなかった。現在ならば、その不公平などについて論議がたたかわされるであろうが、戦時中のこととて、問答無用で押し切られてしまった。

当時は、上級学校の入学試験は、専門学校といわれた、高等商業、高等工業、高等農林、医学専門学校などは、中学五年を終了しないと受験ができなくて、高等学校や大学予科、陸士、海兵などは、四年終了時で受験できたから、中には四修で合格する者が二クラス分も出る府立中学や私立名門校もあったが、二カ年分の生徒を、大した募集人員の増加もなく、同時に受験させたのだから、ずいぶんと荒っぽい教育行政だった。

◇サイレンに叩き起こされ谷中署へ

東京の初空襲は意外に早かった。昭和十六年十二月八日の開戦以来の赫々たる戦果に酔っていた日本本土を空襲して、日本国民を動揺させるべく、昭和十七年四月十八日、米空軍のドーリットル中佐率いるB25が東京ほか四都市を空襲した。この日、朝から快晴のぽかぽか陽気のお昼休み、いきなり、「ばばん、ばばん」という高射砲の音響と、ふあっ、ふあっと青空に残る破裂煙が、時ならぬ春のお昼どきの東京っ子の心をゆさぶった。本郷からは、尾久の旭電化あたりに、届かぬ高射砲の煙をしり目に飛び去る。カーキ色のB25を確かに把えることが出来た。実際の被害は殆んどなかったが、この空襲には、神経的に大打撃を受けたのを想い出す。

昭和十八年五月十二日に、アッツ島の玉砕以来、次第に制海、制空権を失った日本は、度重なる空襲に見舞われることとなった。二十歳の徴兵制度が十八歳にまで拡大された中で、昭和三年生まれの私共は、いつのまにか、国内では若い者がしらという位置にあった。その頃、空襲警報が鳴ったら、それが十二時であれ、午前二時であれ、直ちに飛び起きて、谷中警察署に詰めることが我々に義務づけられていた。これは、蓬莱町や根津や谷中に住んでいる中学上級生に、地域的な割り当てが来ていた。京華中学や郁文館中学の生徒たちに、警防団から要請があったものと考えられる。

だから、夜寝る時には、戦斗帽、制服、ゲートル、鉄カブトを枕元に置き、いつなんどきサイレンが鳴っても、直ちに起きて服装を整え、鳶口を持って谷中警察署の二階に詰め、爆撃に備えた。空襲警報が出ると、街は道路も家々も真暗になって、それは無気味な静まりの中を、根津権現をぬけて、谷中の坂を上がり、今も昔のままある谷中署の二階の部屋で待機した。空襲警報が解除されると、家に帰って床につくわけだが、土曜日など、米軍は、我々を寝かせないため、たった一機で東京を何度か襲って来たので、折角寝ようとする矢切に、またもや、いまいましくもサイレンで叩き起こされることになった。食いたい盛りに何も食えず、着る物も十分でなく、覆くものもひどく、その上、夜もろくに寝れず、国内にいる者も戦地並みの生活を送っていた。だから、何時やられるかわから

ない日々を過ごしていた我々中学生は、他の学校の生徒とも、心底から語り合ったり、友情を深めることも出来たので、郁文館の生徒も他校の生徒という気はしなかったものである。

蓬萊句壇

五月例会　於海蔵寺5月29日
兼題　枇杷・走り梅雨

天　枇杷青しかつて文士の棲みし跡　京子
　友の訃に接して
地　五月雨や落つるしずくの順不同　連木
人　まだ青きびわ色づくを待つこころ　吉次
人　病濃く枇杷の包みをほどきかね　禎一
　木目浮く床板の艶走り梅雨　喜一
　初夏や華燭に遠き多摩の峰　蓼雨

六月例会　於海蔵寺6月27日
兼題　羅（ウスモノ）・更衣（コロモガエ）

天　羅のかくすと見せてかくさざる　連木
地　梅雨寒や二階の塾のひそとして　喜一
人　花莫莚の幾何学模様とんと踏む　笑子
人　学僧の項の蒼き更衣　京子
　うつりけり姉色白に藍上布　スエ
　五月尽古今語らふ喜寿の宴　千重

蓬萊句会吟行録

楠　眞幸

ぎんこうーと聞いて、誰しも思い浮かべる文字は「銀行」であろう。少なくとも私はそうであった。

吟行。広辞苑によれば「作句などのため、同好者が野外や名所旧跡に出かけて行くこと」とある。

蓬萊句会の吟行も今回が二度目、もはや「銀行」に行く戸惑いはなかったが、さりとて「ちょいと一杯」の気楽さには到底なれない私であった。

この句会の提唱者であり、プロデューサーでもある池田文化部長（句会々長）は、当初「俳句の幼稚園だ」と町会員に呼びかけた。それでも、私が二の足を踏んでいたのは、非才の上に、風流や粋には無縁の自分を知っていたからであった。それなのに、ああそれなのに、青木棟梁の巧みな口車に乗せられて、昨年五月ついふらふらと入会してしまったのである。

そんな私だから、幼稚園の教課を超えた吟行に、喜んでついて行かれる筈がない。第一、銀行にだって大威張りで預金の出来る立場になく、常に平身低頭しては借金を申し込んでいる私だから、吟行も銀行も苦行の場であることに変わりはなかった。

閑話休題。そんな私の胸のうちとは関係なく、四月二十八日、われら蓬萊句会は、目的地向島百花園に向かって出立した。一部直行組を除いて、午後一時、本所吾妻橋駅に集合、隅田堤の散策も吟行のうちであった。

やや汗ばむほどの吟行日和。先導するは、蓬萊句会が宗匠と仰ぐ古川沛雨亭氏である。何しろ、浅草生まれの向島育ちという、粋が背広を着て歩いているような御仁。句碑や神社仏閣は言うに及ばず、鳩の街はじめ粋筋の説明も堂に入ったもの、一同感服して襟を正すのであった。

最近竣工したばかりの桜橋（歩行者専用）を渡る。折柄、ゴールデンウィークの初日とあって、橋上は家族連れで大賑い。

「ここで一句」「さて一句」

と、実力派はノートを出したが、いわゆる年少組である私と坂本氏には、この人波の中で鉛筆を動かすのは無理で、若きミニスカートに脂下がっている方が性に合っていた。

百花園への道程、歩くにはちと遠かった。

しかし、弱音は吐けぬ。何せ、八十才の翁氏が悠々闊歩しているし、私より年長の宗匠や会長の足取りも軽い。ご婦人連の裾捌きは鮮やかで、石段を昇る白足袋の上歴が私の目に眩しい。

途中、言問だんごでひと休みの予定が、満員で叶わず、百花園内御成座敷で味わうこととなる。先輩達は、団子もそこそこに三々五々園内に散って行ったが、

「花より団子だ」

と、私と坂本氏は腰を据えた。だが、そこはそれ、年少組の悲しさ、あまり図々しい真似は出来ない。

「二時半から始めますよ」

池田会長の声に追いたてられて表に出る。園内は文字どおりの百花繚乱、とても私のテに負える情景ではなかった。それでも、何とかノルマ四句をものして席に着く。

皆さんはさらさらと書いて提出するが、私は書き乍ら更に女々しく推敲だ。

清記、選句と続いて、愈々披講となる。

選句が、次々と会長によって朗詠されるが、私の句はさっぱり出てこない。

ひろし（堀江）、えみ子（鈴木）両氏はどんどん票を伸ばしている。

私よりはいいが、喜一（青木）、松夫（翁）、禎一（坂本）の三氏もさえない。

黒揚羽せり上り翔ぶ小伝次碑　ひろし

春風もすれ違うてや桜橋　えみ子

昇殿す春や呵呵の獅子頭　沛雨亭

これらが高点獲得句だった。

最後に、宗匠の入選、特選、人、地、天と進むのであるが、最後の最後、天のところで「わあーっ」と歓声があがった。

人、花屋敷一と雨ごとに実梅生れ　たかし

人、柳北のぼたんを愛でる細面　連木

地、レガッタの櫂のしぶきや花見橋　たかし

天、鳥交る百花の庭の昼下り　禎一

並み居るベテラン、年長組を押さえて、坂本氏が天を取ったのだ。歓声には更に意味があった。彼は、前回の吟行も天だったのだ。

「吟行に強い！ぎんこうとうどりか？」

「まるで、ぎんこうギャングだ」

駄酒落も飛んで、彼の天は祝福された。

吟行連勝、これは大変な記録である。二賞常連の喜一氏も脱帽の快挙であった。

ここで、タイミングよく御成座敷に料理が運ばれてきた。三千五百円会費にしては豪勢なものだったが、傷心の私には、刺身のツマだけがやけに眼に泌みる重箱であった。

なぜか今日は不振だった両氏の気配をうかがえば、喜一氏は泰然自若、松夫氏は瓢々と宗匠の講評に耳を傾けて、杯を重ねていた。

さもありなん、御両所、賞にもれたとはいえ、立派な特選句を残している。

百花園時へし今も若葉風　喜一

葉桜になってうらめし散歩道　松夫

書き遅れたが、この吟行、参加者十四名、うち正会員は七名であった。会長の句友が応援参加して、やっと盛会をみた訳で、兎に角会員不足である。

町会員の皆様、どうか御入会願いたい。特に若葉（初心者）マークの私がお待ち申し上げる。

なあに、たかが十七文字、誰だって俳句は出来る。

はるみ節余韻は遙か除夜の鐘　眞幸

左様、はるみファンの私が、あの最後の絶唱前に心情を吐露したものである。残念乍ら、この句も大方の支持は得られなかったが、私自身は大傑作と信じている。

所詮、俳句はお遊びだから、これでいいのだ御同輩！　気軽な参加を期待する。

終わりに、応援参加の皆様へ厚く御礼申し上げると共に、入賞のたかし氏以外の句は、掲載を割愛させて頂いたことをお詫びする。

字数の関係とか、本誌の性格上と書き流したいところだが、皆様とは偏差値の劣る私の僻みでもある。諒とされたい。

すえさん、千恵さんの欠席は残念であった。

町会活動の概要

昭和60年2月中旬から6月末日まで

総務部

3／5　文京区町会連合会常任理事会に出席

3／中旬　昭和60年度商業調査員を委嘱され役員

が調査を実施

3/下旬　「縁の羽根」募金、町会一括払込みいたしました。

6/20　町会・蓬莱友の会共催により「東京湾巡り」を実施したところ、多数のご参加をいただき有難うございました。

防火部

5/24　文京区役所主催、防災講習会に婦人部参加しました。

6/2　文京区役所・本郷消防署主催の防災リーダー講習会が開かれ、町会防火部・婦人部・青年部が参加しました。

防犯部

3/27　「春の防犯運動」が実施されました。

～3/31　昭和59年度中の駒込警察署管内、家宅侵入による盗難被害件数は一三八件もあったとのことです。
被害にあわない様にご注意下さい。

婦人部

5/3　「根津神社つつじ祭」、開催中の甘酒販売に婦人部がお手伝いしました。

6/15　日赤募金には、町内皆様のご厚志により左記の金額が集まりました。
一金　一五五、九八二円

6/18　本郷防火協会、防火婦人部総会に出席

衛生部

6/下旬　本年も区役所から殺虫剤が町会あて届きましたので、地域担当役員を通じ各家庭に配布いたします。

交通部

4/6　春の全国交通安全運動

～4/15　交通部・婦人部の各部員に加え、今回から友の会の方にも参加され、街頭で安全運転の啓蒙に努めました。

青年部

青年部では町内の若い方々の部員参加をお推めしております。
ぜひご参画をお願いいたします。若者の大きな輪によって、より良い町づくりに青年部は努めております。どうぞご協力下さい。

文化部

町会員のお子様で本年小学校に入学された方のお名前を左記に載せさせて頂きました。
誠にお目出とうございます。益々のご成長を祈念いたしまして当町会から心ばかりの祝品をお贈りいたしました。

記

須藤尚彦様　眞下昭博様　久貝　泉様　高野結美様
宇名利美様　笹田伸一様　小林友子様　田上友紀子様
川瀬敦之様　市角直子様　阿部直明様

訃報

当町会にお住いの方で、6月までの間にご逝去された方々のご氏名は、左記のとおりでございます。
謹んで弔意を申し上げご冥福をお祈りいたします。

記

小山シロ様　鯉田より様　中村あや子様　関万次郎様
大塚幸吉様　雄川靖夫様　池沢泰明様　萱谷茂雄様

編集部

前号でご紹介しました、林順信氏の近著「国鉄の旅」全十巻が「保育社」から出されます。七月末から毎月一巻づつ出される予定です。
『〝旅〟と〝旅行〟はちがう。自分でプランを立てて、その土地のもつ趣と味とにおいを十二分に汲みとろう』と筆者がオリジナルな旅を繰りひろげています。
本号がお手元に届くころは、永かった梅雨も明けて、夏本番を迎えていることでしょう。皆さん暑さにまけず元気でお過ごし下さい。8月には恒例の盆踊りも企画しております。どうぞお楽しみに。次号の発行は9月を予定しております。

編集委員
小林音吉　竹中一馬　猪熊良晃
高橋一郎　翁　松夫　池田　暉